

42号(1999年)

巻頭の言葉より

ビールのようにゴクゴクゴクン
喜び 悲しみ 憎しみ 苦しみ
愛や 夢や 誇りや勇気 焦りに
怒りに 嫉妬に 迷い 友情 後
悔 感謝 エゴ いろんな思いを
飲み込んで明日は今日より良い女
< 632 >



43号(2000年)

クラブを引退して心にポカンと穴が開いたような気がしていたある日、女子PWに誘われた。さすが女子PW。当然のように全日程快晴。桂ちゃんと私にとっては待望の、でも最初で最後の、一回生から4回生まで全学年が揃った女子PWであった。久しぶりの山、理想の女子PW。しんどかったけれども、この感覚がとても懐かしかった。私は体中が満たされていた。 < 620 >

現役の活動を終えた秋、ワングルの思い出と一緒に湧き上がる、このなんだか切なくなる気持ち、嬉しいのか悲しいのか、寂しいのか懐かしいのか、情熱的だった夏が終わった後の、この得も言われぬ気分、私はワングルを思うとき、いつも「秋の気分」になってしまいます。

< 626 >

44号(2001年)

ニュージーランド遠征 (2001年2~3月春合宿) 女子2名参加

2001年8月ワンダーフォーゲル部に入部して4年目の夏、北アルプス「穂高岳山荘」で一ヶ月アルバイトをして過ごした。ワングル4年目の夏をどのように過ごすか…。今までの3ヶ月は、考える間もなく夏の半分は合宿の予定がはいていた。そして4年目、形は違えど、山で過ごしている自分がいた。それは自分にとって自然だったし、これからも登山をはじめとするアウトドアには現役でいたいと思う。大学時代にこんな楽しみを教えてくれたこの部に感謝している。山小屋での日々は改めて私に、大学生活で山をやっていて、ワンダーフォーゲル部に入っていて良かったと思わせてくれるものだった。 < 631 >

45号(2003年)

大学のワングエルは辛い。何が辛いかといって、一緒にやっていた部員が辞めて行く事だ。8人入部したはずの一回生も気付けば女子3人。現役唯一の先輩も辞めてしまった。豊橋まで一緒にチャリをこいだ友達も引き止められなかった時はさすがに落ち込んでしまった。

でももう辞めない。寒いのが苦手な私には、雪山の寒さは想像も及ばない。はっきり言って好きになれる自信はない。でも、根性で頑張ります。私たちの代で同大ワングエルは終わったとは言わせたくない。 < 647 >

(彼女はDWVの初の女子主将となりました。)

46号(2003年)

巻頭の言葉より

一つ一つの山の姿。そしてワングエル。
あなたの心にどう響きますか？
どう活かしていきますか？
それが、あなたの中の一つの面に。
< 686 >

47号(2004年)

ワンダーフォーゲルの部員同士は、あまりに長い時間を共有しているだけに、言えないこともあるかもしれません。しかしワングエルを離れて一社会人となり、少し距離が出来た時、初めて相談できるという関係になれる気がしています。 < 648 >

ワングエルは

年月と共に形を変えていく。「100周年記念式典」は

どんなだろう？今のワングエルの形態はどう変化していくのだろうか……。

50周年プレイベントの時、創立当時は山岳競技というものが始まることすら考えられなかったと、OBさんがおっしゃっていた。昔は歌をたくさん歌っていたとか。私のワングエルはワングエルの絶対形だと思っていたけど、移り変わる中の一歩だったのかな。ふと、OBさんの「安曇野節」だったっけ。

歌が聴きたくなった。 < 653 >

49号(2006年)

3年を通し、登山に対する考え方も変わってきた。以前は自分の忍耐との勝負だったが、今は純粋に楽しい。沢山の人の応援や支えがあって、活動が成り立っている。そのことが3回生になって一番思う事だ。個人的にはなかなか余裕のない日々だが、感謝の気持ちを忘れずにいたい。現役としての活動の日々の終わりが少しずつ見えてきた。なんとなく長くも短い3年間。今はまだ振り返るには少し早い。残りの現役時代も精一杯駆け抜けて行こう。 < 658 >

50号(2007年)

創立50周年記念式典開催、記念誌発行

この式典でOB/OGさんのまだまだ若々しい、元気なパワーをもらった。今まで全く知らなかった人が、同大ワンゲル部という接点によって絆が生まれるのは新鮮な体験だったし、素晴らしい機会だったと思う。 < 672 >

ヒマラヤ遠征 ネパール カラ・パタール (5545 m)

遠征により、その間の活動が手薄になるということで、実際のところ遠征には賛否両論あると思うが、今後の活動の選択の幅が広がった点においては、意味はあるように思う。目標を決め、それを達成するには何が必要かを皆で協力して取り組み解決していく、その過程はとても重要なプロセスであり、今回遠征の準備、実践を行うことは貴重な経験になった。今後、後輩たちがどういった活動をしていくかは未知数だが、今回の遠征を踏み台に色々なことに挑戦して行ってほしいと思う。 < 658 >

51号(2008年)

念願の女子パーティー大成功

夏合宿(北アルプス 唐松岳～槍ヶ岳縦走)

女子だけの長い合宿には不安もありましたが、天候にも恵まれ、無事成功して本当にやって良かったと思います。2回生の頃は男子と同じ活動することに不満を持っていました。だから女子

パに挑戦したって事ではないけど、何故一緒に合宿をしなければいけないのか？同じトレーニングメニューなのか？きっとワングルにいた女子部員も思った事でしょう。体力の違いより、通じない気持ちや言葉に悔しさがあり、荷物の重たさより待たせてしまうプレッシャーがしんどい……。今年、女子パーティーをやってみて、精神的にかなり楽でした。歩きやすいし、コミュニケーションがとりやすい、それからトイレにも行きやすい、初めての女子パーティーということもあってモチベーションも高く、チームワークも最強でした！ < 667 >

52号(2009年)

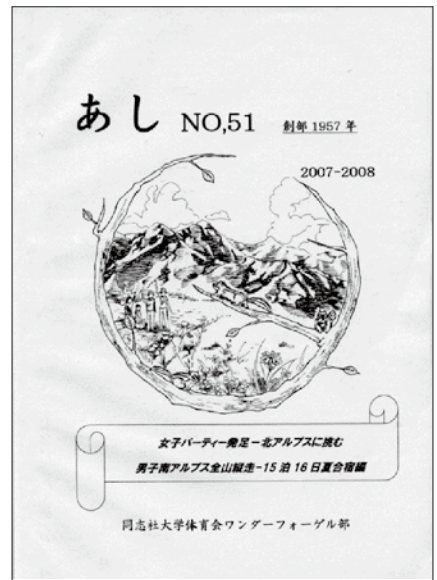
都会から離れることで本能的に本来の自分を見つめ直す機会を得ようとしているのかもしれない。社会はどんどん便利になる、しかし、人間は便利で快適な社会になろうとすればするほど、気持ちが荒み、コミュニケーションの希薄さが目立ってくるのであろう。電話やメールを使って間接的に伝えることのできない山の中だからこそ、直接ぶつかり合うことが出来、本能的に共に助け合う精神がいつも以上に機能するのかもしれない。

< 665 >

53号(2010年)

最後まで続けることにした理由の一つは、大学入学の希望に満ちあふれていた自分がかかりさせたくなかったからである。遠い宮城県からたった一人で京都にやって来て、学生生活を謳歌したい！新しいことを始めたい！と思って即決したワングル部。途中でやめてしまったら、その時の自分の気持ちを踏みにじってしまうことになる。もう一つは山の景色、休憩の時に見る景色は心洗われる思いがする。自然の雄大さに圧倒され、自分を包み込んでくれるような、温かい、ぬくもりのようなものを感じる。

< 672 >



表紙に女子パーティー発足の文字



52号の表紙より「槍ヶ岳山頂で」

54号(2011年)

女子部員ゼロになる。(>_<)

55号(2012年)

そして、待望の女子部員入部！(^o^)

渡り鳥の隊列の

中で前から2番目にいる鳥は隊列の先頭を飛ぶ経験の少なく群れを率いる能力の低い個体だと言う話を聞きました。先頭の後ろについて飛ぶことで渡りの技術を学ぶそうです。

一次新錬、二次新錬、夏合宿に加え沢 PW と山に登る機会があったわけですが2番目を歩く機会が多くありました。というより2番目しか歩いたことがないと思います。 < 692 >

56号(2013年)

そして今、その鳥は女子の群れを率いて、隊列の先頭を飛んでいます。「ワングルの母」と下級生から慕われて・・・

フレ-、フレ- ワングル!

フレ- フレ- ワングル女子!

永遠にこの歴史が続きますように・・・

注：囲みのないのは、主に女子リーダーとしての年間計画あるいは役目を終えての反省文から、吹き出しの中は主に私記の中から抜粋しました。

「体育会ワッゲル女子誕生 50 周年記念誌」発行にあたり、寄稿文をお寄せいただき、ありがとうございました。

皆さんからお寄せいただいたアンケートの中に、回答以外のコメントを書き込んでくださった方が多くあり、その一つ一つが私たち自身の思い出とオーバーラップして、目頭が熱くなることも一度や二度ではありませんでした。是非皆さんにも読んでいただきたいと思い、寄稿文と共に、ここに掲載させていただきました。

実行委員会

自然にはぐくまれた私

No.1 金澤 加恵子

生まれて、もう -----76 年。

ふり返り、いろいろ沢山思い出す筈なのだが、なぜか自然とのふれあいが多いのは都会生れであるが故と思う。

昭和 19 年、小学校一年生の時、戦争による疎開の為、現兵庫県川西市の曾祖母一家 5 人のもとに家族を離れ、たった一人で預けられた。この地は、今は大阪への通勤圏であるが、当時は田舎そのものであった。

終戦前より一家（父は軍隊、母、妹二人）が疎開していた祖父宅、現大阪府豊能郡の母の実家（当時、祖父健在）へ二年生の初めより私も移り住んだ。

終戦を迎え、昭和 20 年秋、父の復員にあわせて生れ育った元の住居（大阪市北区）に帰ってくることが出来た。

小学校生活は女組から男女組になり疎開帰りの子供がふえ三学級になった。（150 名位）五年生になり学校内にボーイスカウト、ガールスカウトの分隊が置かれ、早速入隊し、疎開以来の自然とのふれあいが再開した。

給食室の薪を一人 2 本ずつリックサックにつめこんで笠置山に登ったのが一番心に残っている。

中学校に進学時は地元中学には校舎がなく、小学校に間借り状態の為、女子のみの 6 年一貫校に入学、高一より山岳部に入部。

その頃、わが校の山岳部は活発に活動し、私の一学年上の部員は国体（鳥海山）にも参加。

大阪府高体連に加入、参加していた女子高の山岳部はとても少なかった。

高校三年間は夏山登山（槍、穂高縦走、劔、立山、八ヶ峯）、野沢や神鍋へのスキー、金剛山、比良山、六甲山での岩登り、国体予選に出場し大阪府代表選手（男子 2 名、女子 1 名）に ----- 四国石鎚山会場の年。

残念ながら親の考えで不参加など、いよいよ自然とのふれあいが増した。

女子大二年の折、「DWV 創部、部員募集」の貼り紙を見て入部したが、12 月の追出し登山（くま笹の上に雪がふんわりの比良山）までという短い DWV 生活であり、私の自然との一つの区切

りとなった。

家庭生活に入り二人の娘を育てる中、苦手な海や大好きな雪の金剛山ですぎし日々を思い出していた。

私と自然とのつながりは少なくなっていた日々であったが、裾野は広がった今日である。

娘二人は学生時代より私の強力な勧めでスキーを始め、今も家族スキーを楽しんでいる。

孫息子は大学生生活をスキー部に「どっぷり」という充実ぶりであった。

小一で田舎の生活になり、大阪へ戻るまで土にふれ大地にはぐくまれた生活すべてが私の貴重な思い出である。

高校生活以後つづけているコーラス部は、現在は地元の生涯教育事業の一つで混声四部に所属して唄っている。

その中で昨年より練習し発表の機会もあった曲、大木淳夫作詞、佐藤 眞作曲、混声四部「大地讃頌」は今の私の心に深くしみ入る曲となった。

「参考までに」

第七楽章 大地讃頌 大木淳夫作詞・佐藤 眞作曲

(歌詞の中より)

「母なる大地のふところに
我ら人の子のよろこびはある
大地を愛せよ 大地に生きる
人の子ら土に感謝せよ
平和な大地を 静かな大地を
(中 略)
母なる大地をたたえよ ほめよ
母なる大地をたたえよ 大地を」



南アルプス 渡渉中



1960年秋合宿御嶽山

遠い目の山 ー北アルプスー

No.62 岡嶋 恵美子

1960年数年ぶりに女子の入部が認められて、3回生でしたが同じ下宿の高橋(旧姓木戸)さんと入部しました。ですから実質2年間しか活動していません。しかし、この2年間に比叡山・比良山・南アルプス・北アルプス・御嶽・北山・大隅半島・伊吹山・大山・大雪山・南小谷…随分いろいろな山々を訪れました。

それから半世紀余りたってみると、その思い出は風化してしまって、いまでは一山一事程度にすぎません。そのなかで北アルプスでの夏合宿は例外です。はじめての長期でもありさまざまな

場面をあざやかに思いだすことができます。たまたま老前(中)整理しようとしていたダンボール箱から、その時の要項(他の合宿の要項も)がみつかりました。いまでは古びて紙は茶色に変わり、ところどころやぶけるなど劣化していました。夏合宿は、先発隊(男子)が白馬・立山・徳本の3パーティと後発の女子隊(3年2名、1年4名)の4構成でした。

女子隊は白馬隊より11日遅れて出発。翌日松本からバスで上高地へ、さらに徳澤をへてベースキャンプの横尾に到着しました。上高地では、白馬隊の二人が出迎えてくれて、母が縫ってくれた細長い晒の袋に入れて持参した二升五合のお米を、ひょいと首にかけてもっていただいたことがどんなにありがたかったことか! 翌日からは横尾をベースに、槍ヶ岳、蝶ヶ岳・大滝山、奥穂高へと順次のぼりました。体力的に自信のない私は、3年生という立場もあり、バテて仲間迷惑をかけてはいけないという一心で、まわりのすばらしい景色もまったく目にはいりません。そのようななかでも、オレンジ色のニッコウキスゲだけは、いまでも色鮮やかに目にうかべることができます。

その名は、横尾から同行してくださった温厚なお人柄の中川雍一監督に教わったものです。槍では岩場の鎖、頂上の狭さに驚き、蝶から見晴らせるはずの槍・穂高連峰のすばらしい展望も、まったく記憶に残っていません。その上、テントが点在する明るい涸沢の情景はうかんでくるのですが、折角のあこがれの山・奥穂についてはまったく記憶の外、よほど行程が大変だったのかもしれない。次の日は、一度上高地にもどり、要項にあった焼岳には登らず、大正池あたりを散策、息抜きをしたようです。ただ、折角張ったテントを先輩の足蹴で倒され、張りなおす羽目になったこと、藤田さんの豪快ともいえる食事づくりに、男子ともども感動したことなどが懐かしく思い出されます。

帰路は、徳本峠をこえ、島々までは静かな林道をとりました。串田孫一も「帰ることが一つの満足だった」(詩の一節)といわれたように、女子全員が長い日程を無事におえることができたことに満ち足りた気持ちでした。

松本で籠に入った青いりんごを買い、帰りの汽車に乗ったものの、十日余りも重いザックを背負い、下ばかりみながら歩いたせいで、まふたが腫れ、日焼けで真赤になった顔も恥ずかしく、やはり下を向いたまま実家に辿りついたことをはっきりと思い出します。

これがわたくしの「遠い遠い日の山」の記憶です。今は古希もすぎ、南大阪在住の仲間による山の会「さざんくろす」にときどき参加させていただいたり、友人・家人と近くの山に花を求めてでかけています。私はD.V.V.での活動をとおして、人とのつながり、自然とのつながりを深めることができたことに、心から感謝しています。



◀ 1960年(北アルプス)
夏合宿女子部員6名

1960年度夏合宿要項 ▶
パソコンもコピーもなかった
当時は、全て手書きでガ
リ版刷り

資料提供
岡嶋 恵美子さん



女子パーティー設立五十周年に寄せて

No.153 吉田 梢

ある日、同期の荒木彩子さんから連絡が入った。「今年は私達がワングルに入って五十年や。女子パーが出来て五十年という事やし、記念誌が何か出したいなァ」

そうか、半世紀か。思い起せば五十年前、かなりすねた心で津軽の海をわたり、この京都にやって来た。

オリエンテーリング中、M地下にペタペタ貼ってあった北アルプスの山々の写真、「山はあなたを呼んでいる -----」、これだと思った。

悲しい事はすべて忘れて、思いっきり体を動かし自然にひたろう -----。

それから半世紀、古希も近づいた私は、この京都で死んだ後の段取りまで考えている。

女子1期生四人組は今も益々元気(?)で、可愛い後輩女子組と良いおつき合いが続く。つい先日も転居された中川さん宅でおしゃべり会が開かれ、ワイワイガヤガヤ。然も皆元気で、学生時代は大人しいと思っていた人までがしゃべるしゃべる。女は、母は、たくましいなァとしみじみ実感。

ここに1才上の「ミチさん」がいてくれたら尚良かったなァ。

当時のリーダー会が不慣れな我々のために、無理に頼んで入ってもらった鈴木先輩の妹さんだ。小さな体で頑張って下さったが、卒業後、昭和55年病死。

背中に赤ちゃんをおぶり、両手に二人の幼な子を連れ、大徳寺の我が家を訪ねてくれた姿が忘れられない。

でもそれ以降、女子パーの歴史は連綿と続き、時に主将、主務役を務め、時に男子の中でたった一人の時期もあったが、皆各々に健闘してくれて今日がある。

人類の長い歴史の中で男女はやはりいびつにならず、協力し合い特性を生かし合って行かなければおかし。

ワングルも一時男子ばかりの時期があったが、やはりそれは不自然で、クラブもOB会も今や女子抜きでは成立し難いのではないだろうか。

私も長くOB会に関わってきた関係で沢山「現役→OG」になっていく女子を見てきたが、どの娘もなかなかユニークで、その上頑張り屋さんが多かった。一人ひとりの顔を思い出しながら、今はシワも少し増えたかな、私達がこれだからなァ等と感慨にふける。

願わくば女子パーティー五十年の歴史が更に百年史とならん事を。

それは取りも直さずワングルそのものが長く続く事を願っているわけで、全てのOB、OGが同じ思いだろう。

ありがとう五十周年 ----- そして、これからもよろしく ----

阪神

淡路大震災で写真

も残してあった「あし」、

要項もみんなどろどろになり捨ててしまったので、不確かな記憶で、アンケート書きましたが、女子部員の歴史の出発点に立っていた一人として、何か伝えればと願っています。

< 155 >

反省から学習へ

No.309 山本 知恵子

三回生の時のことです。季節は忘れまして。

京都の下鴨に「北斗プリント社」という印刷屋が、今もあります。

1学年下の野田 稔さんが「山へ行くので、その間に印刷屋さんに行っておいて欲しい。」と女子に頼まれて行かれました。

ところが私達は彼の頼み事をいい加減に不誠実に聞いていて、印刷屋に行きませんでした。

何日か経って下山してきた野田君はとても怒られ、困っておられました。申し訳ないことをしました。

大分前にある所で「ハイ、ニコッ、パッ！」というのを教えてもらいました。

それは人からものを頼まれたら「ハイ」と返事をして、にっこり笑って、そしてすぐにパッパッと行動するということです。

私達は自分自身で出来ることは人には頼みません。

野田君も自分が登山に行って居ないから、私達女子に印刷を頼まれたのです。

家庭でも私達は夫や子供からしばしば用事を頼まれます。(私の夫は既に他界)

ところが私達は大概の場合、子供からの用事は「ハイ、ニコッ、パッ！」なのですが、夫からの用事はどうもなかなか、そのような訳にはまいりません。

自分が出来ないことや、或いは苦手な事を家族や周りの人達が助けてくれるのは本当に有難いことです。

だから私達も人から頼まれたことは迅速に誠実にしていかななくてはなりません。

今も毎日のように「北斗プリント社」の前を通りますが、いつも「野田君、本当にごめんなさい。」と詫びると同時に、人から頼まれたことはちゃんとしていこうと肝に銘じる日々であります。

アンケートを書きながら、楽しかった学生クラブ時代を思い出しております

< 406 >

何も知らなかった私が1回生の夏合宿9泊10日と云う長期合宿で自信が付き、その後の私につながりました。

それはワングル的にはもちろんですが、人生で何か苦しいとき負けそうになったときにはいつもこの1回生の夏が思い出され私を勇気づけてくれます、今も。しんどかったあの夏に感謝感謝です。

< 341 >



DWVで学んだ女子力

No.323 内田 幸子

大学に入る前からワングルに入ろうと思っていた私は、DWVに入って本当に幸せな大学生活を送ることができました。

なにより印象的だったのは、1回生の夏合宿です。1年生は7人、4年生は塚原さん、おひとりでした。4年生の男性の安藤さんがオブザーバーとしてついてくださいました。

今考えると新人7人を連れて北アルプスを縦走するというのは、どんなに大変だったろうと思います。そのとき先輩が「眠れなかった」とおっしゃっていた真の意味は、今でも想像するにあまりあります。

3年の高橋さん、2年の山田さん、翼さんも本当によくみんなの面倒を見てくださいました。私達の仲間は、ただただ必死で、そして、北アルプスの素晴らしさを味わい、楽しんでいました。女子が協力していろんなことをやっていき、男子がよくサポートしてくれる、そんな関係がとてもうまくいっていたから、幸せなDWV生活を送れたのだと思います。

卒業後も女子の多い職場やいろんなグループで活動していますが、DWVの時に先輩が示して下さった女子力（やるべきことをやり、じっと見守るなど）が役に立ち、よりよく生きることができています。ありがとうございます。

卒業して31年。昨年32年ぶりに屋久島に行きました。当時の屋久島は世界遺産になる前で、今から思うと本当に良い時代に行けたと思います。もう一枚は一回生の夏合宿で、南アの熊ノ平のお花畑。こちらも鹿の繁殖でお花畑は現在全滅と聞いています。

卒業後も山を続けられたのはやはり学生時代のクラブが原点だと思います。学生の頃から比べると最近の山事情は本当に変わりましたが、山そのものは不変です。 < 434 >

死なない番号気に入っています。女子だけでは行けない雪山に同行させてもらえた事、大雪山の山歩きの後有志で知床半島の先まで歩いて行けたこと、満天の星や知床半島の先の海の美しさに感動！ヒグマにも会わずに済みました。

山は私にとって人生の師とでもいえるものでしょうか。できる限り今後も山と関わっていければと思います。

最後に後輩の方々には若いうちにしかできないこと頑張ってもらいたいです。

< 471 >

未だにテレビなどで「1975年」という年代を耳にすると、大学生活が鮮やかに甦ってきます。井の中の蛙が大海に出てきて右往左往していた……あの頃の自分を思い返せば面映ゆく、そしてなんとも、もったいなく有難い、懐かしい時間。

先輩に声をかけられ、ある日、学生会館の学食のスプーンを一本お借り(?)して、新歓キャンプに連れて行ってもらいました。

「ある日、ふいにキャンプに行ける?」(高校生だったら随分前から、あれこれ計画表とか、ご指導が入りますよね?)

「これが大学生と言うものなの?」と思いました。

キャンプファイヤー前でO先輩が歌ったのは「なごり雪」でしたよ。

先輩、覚えていらっしゃるでしょうか?

山に惹かれたのが、人に惹かれたのが、おそらく後者の方でした。

それからは殆ど毎日、新町会館の一番奥の薄暗いDWVボックスに通いつめました。

時折、相撲部員と出会える……そんなボックス。

入部当初は同じ学年に2人いた女子部員は夏合宿が終わった段階で1人になっていましたが、すぐ上の2回生の先輩もただ1人でしたし、さほど不安に感じませんでした。

が、ただ1人の最上級生になった時、今考えると、実力などありはしなかったのに、男子部員並みにとは言わずとも何とか体をなす山行をしようと、肩ひじを張り、見栄も張り、随分とひとりよがり生意気であったと思うのです。

素直に自分の弱さや、いたらなさを見つけ認める能力に欠けていたと思います。

なにしろ、若かったですよね。

同期の男子学生諸氏は人柄も良く、頼りがいもあり、今でも感謝感謝ですが、やはり同じ立場の女子の同級生がいたら、どうであつたらうと思います。

仲の良い男子部員たちに嫉妬していたのかも知れませんね。

さて、そんな私たち1975年組も、入学当初の先輩方も、もうアラ還です。

ちらほらと伝え聞くところによると、悠々自適の老後に突入?のご様子。

私は義父母が91歳と86歳、実父母が89歳と83歳。

子育てはとうに終わりましたが、介護生活に一步足を踏み入れています。

ですが、こうしてみると何かのCMではありませんが、人生まだまだ30年ありそうです。

あの「大きなザック」の呼び名は何だったっけ?

そうそうキスリング。などと少々物覚えも悪くなってきてはいますが、健康に気をつけて、また山も行ってみたいと思うこの頃です。



コマクサ

DWVでの山行きはもう二度と行けない山、そして体験だと思えます。私にとって貴重な体験=宝物です。感謝しています。その後行ったといえばボランティアに行ったネパールで活動した後3泊4日トレッキングしたくらいです。やっぱり山は素敵です。

< 471 >

美しい星空、台風で身も心もボロボロになったこと、自然の中でのトイレ・・・なかなかできない経験をさせていただきました。山が好きなのかどうか結局わかりませんが、嫌いではなかったし、部の雰囲気も良かったし、楽しかったです。

< 510 >

ラフティングでボートが転覆し、流され死ぬかと思った！人生感が変わった。

< 538 >

結婚後一度だけ主人を誘って上高地～岳沢へ行きましたが、あいにくの雨、それ以来夫は付き合いづらくなりました。

< 324 >

今、思うこと

No.495 竹本 和子

昨年の夏、主人と新穂高温泉、上高地、白馬八方へ行ってきました。山は癒しの場所、雄大な自然を前にしてやっぱりいいなあと。美しい景色に感動するだけでなく、自然の中での自分という存在、この感覚はいつまでも大事にしたいと思っています。

現役の時、同学年は男子四人に女子は私一人。同学年の男子に頼っていたような。女子部員が少ない時期は、男子の先輩にオブザーバーとして合宿についてもらったりしました。何故、女子の合宿に？と不満に思われた先輩もおられたかもしれませんが、心強く、本当に感謝でした。今度の合宿ではどの先輩がオブザーバーかな？と期待もあったり。

先輩と私の女子二人、男子と一緒に冬山に行ったこともありました。冬は男女の体力の差を痛

感しました。その上、スキー初心者だった私は悲惨。ザックを背負って滑り下りるのに苦労し、下で皆を長時間待たせてしまったことも。滑っては転びの繰り返しで、自分に対しての悔しさや悲しさよりも、ただただ皆に申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

私が上回生になった時には、女子の後輩もたくさん出来て、7～9人のパーティーが組めるようになりました。とても頼もしく、かわいい後輩たちで、楽しく活動しようと盛り上げてくれ、私自身しっかりせねばという思いでした。

私はワングルを通して、学生時代にしかできないこと、美しい景色（時には自然の怖さ）に出会い、色々な経験、たくさんの思い出、そして仲間が出来ました。たとえしばらく会っていなくても、会えば一瞬にして時間の空白を埋めてしまえるような仲間だと思っています。大学の4年間ワングルをやらせてくれた両親に今は感謝です。夜行列車に乗っての初めての山行の時、最寄駅まで見送りにきてくれた母。笑顔で「行ってらっしゃい。」と送り出してくれました。大学生の娘をもつ今、学生時代という貴重な時間を大切に、やりたい事を見つけ、充実した学生生活を送ってほしいと思っています。

最後になりましたが、女子部員の更なる活動の充実と、DWVの益々の発展を今後も期待しています。

戸隠にての冬山合宿、オブザーバー2名、前田先輩と川上先輩、テント地のスキー場に着いたのは夜……。同期と「もうやめる」とアイコンタクト、つらいつらい冬山でしたが何より思い出になり、あの合宿があったからそれ以後の辛さは乗り越えました！前田先輩、川上先輩は本当に大変だったと思います。感謝しております。

あの時、あの場所でしか出来ない事をやりとげたことは最高の財産です。そしてあの日々を共に過ごした仲間たち、これからもあの時と何も変わらぬままの仲間です。

今アンケート用紙を記入しながら、たくさんの思い出が甦って来てとても幸せな楽しい気分になることが出来ました。 < 601 >

夏の立山で長次郎谷での雪訓、ゴールデンウィーク時の北穂高岳へのアイピンなど、ニュージーランド遠征の為の合宿が技術的にも精神的にも力が付いたと思います。

全体的に人数が少なかったのも、特に女子だからと云う配慮はなかったように思います。個人的には女子パーティーが出来た時はテント内や山行が快適でした。

< 636 >

いつも混合パーティーだったがいつも男子と一緒にいたからこそレベルの高い山行が出来た。(冬山でのピバーク、夏合宿で長期の縦走) < 653 >